

古事記 壺

2016年12月13日

原文： 岩波文庫 古事記

現代語訳： 岸本陸一 （素人が古事記を普通に読む試み。多分日本人なら誰でも読めるはず。中国語の知識は必要。）

古事記 上巻 并序

臣安萬侶言。夫、混元既凝、氣象未效。無名無為。誰知其形。然、乾坤初分、參神造化之首、陰陽斯開、二靈為群品之祖。

太安萬侶が言った。混元は既に凝固しているが、気と象はまだ分離していない。名前もなく、理由もなく、誰もそれを知らない。そのうちに乾坤が初めて分かれて、參神造化（アメノミナカヌシ神、タカミムスヒ神、カミムスヒ神）の元になり、陰陽が開けて二靈（イザナキノ命、イザナミノ命）と群品（万物）の親となった。

古事記の冒頭です。これは中国の易經の考え方です（易經は読んだことありませんが、多分）。この世の創生に関して中国も日本も同じ考え方だよ、と言っています。大和朝廷（天武政権）は中国の古典を読み、中華思想を知ったうえで古事記を書いたのだよ、だから権威があるのだよ、と内外に主張しているように読めます。

所以、出入幽顯、日月彰於洗目、浮沈海水、神祇呈於滌身。

この後、幽顯（黄泉の国と葦原中国）に出入りして、目を洗うと日月（天照大神と月読命）が生まれ、海水に浮沈して、身をすすぐと神祇が現れた。

後で出てくる本文の要約なので、この時点ではなんだか良く分かりません。本文を読めば分かると思いますので、スルーしましょう。

故、太素杳冥、因本教而識孕土産嶋之時、元始綿邈、頼先聖而察生神立人之世。寔知、懸鏡吐珠而百王相續、喫劔切蛇、以萬神蕃息與。議安河而平天下、論小濱而清國土。

この世の初めは暗くははっきりしない。島を生んだり、天の石屋戸隠れがあったり、ヤマタノオロチを退治したり、葦原中国の平定をしたり、いろんなことがあって、大和朝廷の祖先が日本の国土を清めた。（なので今でも神社の神主さんは祓いたまえ、清めたまえと言うのだと思います）

是以、番仁岐命、初降于高千嶺、神倭天皇、經歷于秋津嶋。化熊出川、天劔獲於高倉、生尾遮徑、大鳥導於吉野、列儂攘賊、聞歌伏仇。即、覺夢而敬神祇、所以稱賢后。望烟而撫黎元、於今傳聖帝。定境開邦、制于近淡海、正姓撰氏、勒于遠飛鳥。雖步驟各異文質不同、莫不稽古以繩風猷於既頽・照今以補典教於欲絶。

この時点でニニギノ命が高千穂に降臨。神武天皇が秋津島に行った。神の化身の熊が川から出たり、高天原から降ろされた剣をタカクラジという人から手に入れたり、尾のある人々の歓迎を受け、ヤタガラスが吉野に導いた。舞で賊を追い払ったり、歌で敵を従えたりした。崇神天皇は良い政治を行い賢后と呼ばれた。仁徳天皇は立ち上る煙を見て、民を撫でた。成務天皇は国造や県主を決めて近江を制圧した。允恭天皇は氏姓を正して飛鳥を治めた。その他の天皇も、やり方はいろいろだけれども、道徳を正し、国を安定させた。

暨飛鳥清原大宮御大八洲天皇御世、潛龍體元、洊雷應期。開夢歌而相纂業、投夜水而知承基。然、天時未臻、蟬蛻於南山、人事共給、虎步於東國、皇輿忽駕、凌渡山川、六師雷震、三軍電逝、杖矛擧威、猛士烟起、絳旗耀兵、凶徒瓦解、未移浹辰、氣沚自清。

飛鳥の清原の大宮で大八島国（日本）を治めた天武天皇は、時期が来るまで天子の徳をもって吉野の山に身を潜めていた。ついに時期が到来したので、東国に歩いていき、三軍の六人の武将が奮い立ち、赤い旗を掲げ、悪い奴らを蹴散らした。短時間のうちに邪気は清められた。

乃、放牛息馬、愷悌歸於華夏、卷旌戢戈、儻詠停於都邑。歲次大梁、月躡夾鍾、清原大宮、昇即天位。道軼軒后、德跨周王、握乾符而摠六合、得天統而包八荒、乘二氣之正、齊五行之序、設神理以獎俗、敷英風以弘國。重加、智海浩汗、潭探上古、心鏡焯煌、明觀先代。

牛を放ち、馬を休め、安心して都に帰り、旗を巻き、鉦をおさめ、歌を詠み、舞を踊った。酉年の二月に清原大宮にて天皇即位。道は中国の黄帝のごとく、徳は周王のごとし。天つ日嗣（皇位）を受け継いで、天下をあまねく治めた。陰陽五行に従い、全国に神の道を示し、良い風俗をすすめた。それに加え、知恵は広く、心は鏡のように明るく、歴史に造詣が深い。

於是天皇詔之「朕聞、諸家之所賣帝紀及本辭、既違正實、多加虛偽。當今之時不改其失、未經幾年其旨欲滅。斯乃、邦家之經緯、王化之鴻基焉。故惟、撰錄帝紀、討覈舊辭、削偽定實、欲流後葉。」

天皇は詔った「私は聞いた、『各家に伝わる帝紀（天皇家の系譜）や本辭（神話、伝説、歌物語）は正確ではなく、虚偽の記載が多い。』今これを改めなければ、二度とできなくなるだろう。これはすなわち国家行政組織の経緯、天皇制の基礎である。なので、帝紀と本辭を整え、偽りを改め、後の世に伝えるのだ」

時有舍人、姓稗田、名阿禮、年是廿八、爲人聰明、度目誦口、拂耳勒心。即、勅語阿禮、令誦習帝皇日繼及先代舊辭。然、運移世異、未行其事矣。

天武天皇の側近（舍人）に稗田阿禮（28歳）がいた。聡明で記憶力抜群。天武天皇は稗田阿禮に天皇家の系譜と神話や伝説を整理統合するよう命令した。しかし、天武天皇が亡くなって時代が変わってしまったので、命令を実行できなかった。

伏惟、皇帝陛下、得一光宅、通三亭育、御紫宸而德被馬蹄之所極、坐玄扈而化照船頭之所逮、日浮重暉、

雲散非烟、連柯并穗之瑞、史不絶書、列烽重譯之貢、府無空月。可謂名高文命、徳冠天乙矣。

元明天皇が即位されると、徳が天下に満ちた。天皇が皇居におられると、その徳は遠くの馬の蹄の極まるところまで届き、船の舳先の及ぶ所を照らした。雲は晴れ太陽はますます輝き、米の豊作が続き、官吏はよく働いた。遠方からの納税の順調で、国軍が討伐に向かう必要はなかった。名は夏の禹王より高く、徳は殷の湯王に勝るとも劣らなかった。

於焉、惜舊辭之誤忤、正先紀之謬錯、以和銅四年九月十八日、詔臣安萬侶、撰錄稗田阿禮所誦之勅語舊辭以獻上者、謹隨詔旨、子細採摭。然、上古之時、言意並朴、敷文構句、於字即難。已因訓述者、詞不逮心、全以音連者、事趣更長。

ここに、天皇家の系譜と神話や伝説を正すべく、和銅四年九月十八日をもって臣安萬侶に命令が出た。稗田阿禮が語る言葉を編集して献上すべく詳細な聞き取りが始まった。しかし、日本語を漢字で書き表すのは困難だった、漢文だけで書くと正確に伝わらないし、漢字の音だけを使って仮名で日本語を書くとは長ったらしくなる。

是以今、或一句之中、交用音訓、或一事之内、全以訓錄。即、辭理叵見、以注明、意況易解、更非注。亦、於姓日下謂玖沙訶、於名帶字謂多羅斯、如此之類、隨本不改。

ある文章では音と訓を混ぜて使う。またある文章では全て訓を使う。(音は仮名、訓は漢文のこと) 意味が分かりにくい所には注を付け、分かりやすい所には注はつけない。また、クサカという姓を日下と書いたり、タラシという名前を帯と書いたりするところはオリジナルを使い、改めない。

大抵所記者、自天地開闢始、以訖于小治田御世。故、天御中主神以下、日子波限建鵜草葺不合尊以前、爲上卷、神倭伊波禮毘古天皇以下、品陀御世以前、爲中卷、大雀皇帝以下、小治田大宮以前、爲下卷、并錄三卷、謹以獻上。臣安萬侶、誠惶誠恐、頓首頓首。
和銅五年正月廿八日 正五位上勳五等太朝臣安萬侶

おおまかに言って、天地ができるところから始まり、推古天皇で終わる。天御中主神から日子波限建鵜草葺不合尊までが上巻、神倭伊波禮毘古天皇から品陀御世までが中巻、大雀皇帝から小治田大宮までが下巻。合計三巻を謹んで献上する。和銅五年正月廿八日 正五位上勳五等太朝臣安萬侶

誠惶誠恐、頓首頓首は慣用句。